

六ツ美南部の礎になった人々

この項は六ツ美村誌からの引用である。占部用水の野本新十郎、渡辺弥蔵を除くと、幕末から明治初期にかけて六ツ美南部から誕生した人々を取り上げている。それらの人々は大きく3つに分けることができる。それは、宗教家、小笠原家（小笠原長常）の関係者および実業家である。一般庶民の教育レベルの向上に、宗教家の果たした役割は大きい。

氏名	生存年	居住地	備考
野本新十郎	1500年代後半～1600年代前半	正名町	占部用水
渡辺弥蔵	1500年代後半～1600年代前半	中村町	占部用水
赤松三空	1789～1859	中島町	崇福寺住職
普翁賢問	生誕年不詳～1871	中島町	龍泉寺住職、教育家
森下來藏	1808～1884	中島町	小笠原家の家老職
小笠原長常	1818～1878	中島町	小笠原家の中嶋陣屋
尾崎猪六郎	1819～没年不詳	中島町	小笠原家の中嶋陣屋に勤務
太田廓空	1827～1897	中島町	浄土宗西山深草派法王、龍泉寺住職
平野重兵衛	1827～1894	中島町	小笠原家の御側用人
石川嶺観	1828～没年不詳	中島町	浄光寺住職
鍋田丑之助	1829～1898	中島町	慈善事業推進

関係する寺院の宗派と所在地を表にまとめたので参照の事。

寺院名称	宗派	現住所	備考
崇福寺	浄土宗西山深草派	岡崎市の中島町道海	
常福寺	浄土宗西山深草派	西尾市刈宿町出口	
誓願寺	浄土宗西山深草派	京都市中京区新京極通	北本山
西福寺	浄土宗	西尾市吉良町吉田桐杭27	
圓福寺	浄土宗西山深草派	京都市中京区円福寺町	南本山(現存しない)
堯雲寺	浄土宗西山深草派	西尾市吉良町岡山宮下41-1	
宝珠院	浄土宗西山深草派	幡豆郡吉良町吉田石池18	
西林寺	浄土宗西山深草派	西尾市新在家町下屋下44	
龍泉寺	浄土宗西山深草派	岡崎市中島町字境21	
光明寺	西山浄土宗	長岡京市粟生西条ノ内26-1	総本山
満國寺	浄土宗西山深草派	西尾市一色町味浜堤西7	
真如寺	浄土宗西山深草派	蒲郡市形原町石橋11	

〔圓福寺（円福寺）〕

円福寺（えんぷくじ）の歴史は、1251（建長3）年、浄土宗の西山深草派祖（せいざんふかくさはそ）円空（えんくう）上人が京都深草の里に真宗院を建立したことに始まる。円空上人は、浄土宗を開いた法然（ほうねん）上人の孫弟子に当たり、師匠西山（せいざん）上人から法然上人の教えを正しく受け継いだ。真宗院はその後、円空上人の門弟で、百巻以上の著述を残して深草派の教義を大成した顯意（けんい）上人に受け継がれたが、度重なる火災により焼失した。

1306（徳治元）年顯意上人の門弟・道意上人が真宗院復興の志を起こして、京都猪熊綾小路（現在の四条大宮付近）に仏閣坊舎を建立した。まもなく、時の花園天皇より「円福寺」の寺号、および勅願所の繪旨と莊園を賜り、浄土宗西山深草派の根本道場が確立された。

円福寺第三世堯恵（ぎょうえ）上人は、他宗派からもその講義を聴聞に来るほどの優れた学者

で、数多くの門弟を育てた。その弟子たちは、それぞれ各地方に赴いて念仏道場を建立したが、中でも岡崎市中心の法蔵寺開山・龍芸（りゅうげい）上人は、同朋門下あわせて五十余名を率いて三河国にお念仏を広めた功労者である。現在では、三河地方にその流れを汲む寺院が200寺ほどある。

1788（天明8）年、1864（元治元）年と京の都は大火災が続き、さらに明治維新の際には役所により、円福寺の広い境内地はほとんど没収され、円福寺は本山としての様相を失ってしまった。1883（明治16）年、廓空（かつくう）上人が第63世特命住職となり、宗派を挙げての協議の結果、檀信徒の多い三河地方に移転する話が持ち上がった。南本山円福寺は、岡崎市岩津の妙心寺と寺号を交換することになった（南本山が三河地方に移転）。（圓福寺のホームページより引用、現在の圓福寺の住所：岡崎市岩津町字檀ノ上85）

【野本新十郎・渡辺弥蔵（1500年代後半～1600年代前半）】

野本新十郎（のもと しんじゅろう）と渡辺弥蔵（わたなべ やぞう）の、この2人は江戸時代に占部用水を作るのに尽力した。野本新十郎の遠祖は占部日良麿と言われている。渡辺弥蔵の遠祖は桓武（かんむ）天皇の第2皇子と言われている。渡辺弥蔵の父は尾州徳川公より2百石の禄をもらっていたと言われている。両者は、農民が洪水や日照りの害で苦しんでいたことから、占部用水を作る計画を立てた。1603（慶長8）年矢作川と乙川の合流する天白から水を引き、占部までの8kmの用水路をつくり上げた。農民は土地が減る、金がいるということで大反対であったが、自分の家や土地を全部売り払って成し遂げた。国正町にある思案橋は、2人が占部用水をつくる上で反対され思案したところという言い伝えがある。占部用水の恵みを受けるようになった村々は2人の功績に感謝して占部川神社を建てた。今でも「水愚息」としてお祭りが行われている。

この野本新十郎と渡辺弥蔵は仲のよい庄屋であったが、なぜ、自分たちのすべてを犠牲にしてまでも皆のため、地域のために尽くしたのか今の世の中からはとても想像がつかない。庄屋であったので農民のことを考えてのこととしても、なかなか納得のいくものではない。農民の命を落とす姿を幾度も見ていたからかもしれない。だから、江戸（幕府）にまで請願に行き、命がけて自分のすべてをなげうったと思われる。その思いの強さは相当なものである。まさに、この地域の偉人である。「六ツ美村誌」、「岡崎の人物史」にその記載がある。



占部用水碑 20150725



占部用水碑大正10年頃 手前は思案橋

【赤松三空（1789～1859）】

赤松三空（あかまつ さんくう）は、崇福寺領の所有者（主保）である赤松林右衛門治祐の2男である。性格は穏やかで、幼い頃、崇福寺26世大光演岡大和尚の弟子になり、浄土教を学ぶ。その後、幡豆郡刈宿村（現、西尾市刈宿町）常福寺に住み、1832（天保3）年43才にして崇福寺33世を継承した。1841（天保12）年、京都総本山誓願寺（浄土宗西山深草派総本山）に昇進した。1859（安政6）年9月22日死亡。六ツ美村誌より引用。

（注）大光演岡（だいこうえんけい）は幡豆郡宮崎村（現、西尾市吉良町）の出身で、西福寺（浄土宗）18世、崇福寺26世を経て大本山圓福寺の51世となり、天明の大火（1788（天明8）年）によって焼失した伽藍の再興を成し遂げた。晩年は吉良に戻り、幡豆郡岡山村（現、西尾市吉良町）

の堯雲寺で隠居生活を送った。大光演阿は善導大師の『観無量寿経疏』4巻を顕意道教(1239-1304)が解説した『楷定記』36巻を注釈した本「観経疏楷定記先聞録」を書いた。六ツ美村誌より引用。



観経疏楷定記先聞録(西尾市ホームページより)

[普翁賢阿(生誕年不詳~1871)]

普翁賢阿(ふおう けんけい)は寶飯郡大塚村(現、蒲郡市と宝飯郡御津町に分割)の小林定吉の家に生まれた。幼い頃から幡豆郡吉田村(現、幡豆郡吉良町南部)寶珠院(宝珠院)住職言空證道の弟子になった。瀬戸村(現、西尾市吉良町瀬戸)西林寺に住んでいたが、1832(天保3)年11月18日兄弟子解空上人の跡を継ぎ、龍泉寺の専任になった。龍泉寺で寺子屋を開き、近隣の子弟を集め習字読書を教えた。その間40年間、龍泉寺は檀家がなく、法要もほとんど行われなかったが、田畑が1町余反歩あったのでこれで生計を立て、子弟教養に専任した。鶴田勝藏、水野善十郎、鍋田丑之助、太田廓空などがその門下であった。六ツ美村誌より引用。

[森下來藏(1808~1884)]

森下來藏(もりした らいぞう)は1808(文化5)年5月13日生まれ。祖先は小倉藩で、その後唐津藩に属した。唐津藩士、森下小左衛門の長子で実子は無く、養子を熊男という。また、長崎県士族で、永世祿9石を受け、中嶋領主旗本小笠原家の家老職である。本家唐津藩主より附家老として小笠原家の舊采地(領地)中嶋へ移転の際、随行してそのまま土着し中嶋の人となる。天資多芸にし、和歌俳諧に優れている。雪中菴門下に属し、宗匠となる。青奴はその號である。また、市川米庵について書道を学び特に隷書を得意とした。書道の號は方山。1884(明治17)年病死した。龍泉寺に葬られている。(六ツ美村誌より引用)



森下家墓 20160815

森下來藏は龍泉寺本堂北西にある森下家の墓に眠っている。以下の文が刻まれている。(六ツ美村誌より引用)

翁名は爲方通稱來藏と號す。市川米庵の門に入り書を能くす。世々小笠原家に仕ふ。祖先は小倉藩にて慶長の亂名浪花に戦死す。後唐津藩に屬し又旗本小笠原氏に従ふ。一新の際静岡県に移り當村に土着し明治十七年三月八日喜字の齡に至りて病死せらる。嗚呼悼哉。

早川龍介 謹書

[小笠原長常 (1818~1878)]

小笠原長常（おがさわら ながつね）は、江戸時代末期（幕末）の旗本（中島陣屋 3000 石小笠原氏 7 代当主）である。久貝正満の 4 男として江戸市ヶ谷に生まれ郁七郎と称したが、小笠原長坦の養子となり織部と称した。同じく旗本の久貝正典は兄である。官位は従五位下長門守、筑後守、輕鷗と号した

1843（天保 14）年、家督を継ぎ従五位下長門守に叙任され中奥小姓となる。1853（嘉永 6）年の甲府勤番を経て、1856（安政 3）年に浦賀奉行に就任した。1858（安政 5）年に京都町奉行となって安政の大獄に大きく貢献した。1860（万延元）年に大目付、勘定奉行を、1862（文久 2）年に江戸北町奉行と重職を歴任し、新設された政事改革御用掛にも抜擢される。しかし同年後半、安政の大獄での活動を咎められて書院番頭に左遷させられる。さらに、間もなく免職、隠居処分となり家督を養子の長功に譲った。

1865（慶応元）に、再び登用されて官位を筑後守に改め神奈川奉行に復帰した。1866（慶応 2）年に陸軍奉行、海軍奉行となった。江戸幕府崩壊後、徳川宗家が静岡藩に転封となると、これに従った。1878（明治 11）年に愛知県碧海郡中島村の旧代官早川邸に滞在中に病没。墓所は同所の龍泉寺にある。墓碑には勝海舟の「輕鷗小笠原長常君墓」の墓表、藤原次謙撰文、早川龍介書によるものである。六ツ美村誌に記載がある。

小笠原永常の墓が龍泉寺本堂北西にある。次に碑文を掲げる。碑銘は勝海舟の書である。（六ツ美村誌より）

輕鷗小笠原永常君墓

君諱永常小笠原氏源姓世仕徳川氏始祖爲兵部大輔秀正三男壹岐守忠知忠知母岡崎三郎信康君女也君實遠江守久具正満以子文政元年戊亥十月廿七日生於江戸市谷邸及壯長門守小笠原長坦養以爲嗣初稱郁七郎爲中奥小姓叙従五位下任長門守擢甲府勤番支配轉浦賀奉行累遷京都町奉行大目付勘定奉行江戸町奉行書院番頭坐事退隠無幾又起爲神奈川奉行改筑後守歴進陸軍奉行海軍奉行後致仕號輕鷗君天資温良風采瀟洒長吏事傍善和歌以風流自適焉明治戊辰徳川氏受封於駿河君從移静岡後復還東京戊寅秋遊三河碧海郡中島村蓋舊菜邑也滞寓數日得疾太篤遂以八月十九日沒享年六十有一葬同村龍泉寺人皆痛惜焉君配長担女舉一女養但馬守酒井忠行弟長功爲嗣以女配之

明治十三年庚辰三月 正六位 藤原次謙 撰
海舟先生勝安芳君墓表 早川龍介 書



小笠原長常墓 20160815

【尾崎猪六郎（1819～没年不詳）】

尾崎猪六郎（おざき いろくろう）は1819（文政2）年2月15日下中嶋村（現、岡崎市中嶋町）に生まれる。1839（天保10）年より小笠原長常の中嶋陣屋に奉仕。1873（明治6）年より幡豆郡永良村学校教員になり、1883（明治16）年中等科教員免許を取得。1885（明治18）年八幡社祠掌（神職の職名）拜名。傍ら寺子屋師匠として付近の子弟を教育した。書画が得意で、中嶋村誌を編纂した。六ツ美村誌より引用。

【太田廓空（1827～1897）】

太田廓空（おおた かくくう）は俗名仲四郎と言い、大字中嶋字新町の太田幸助の3男として1827（文政10）年10月に生まれる。幼少のころから頭脳明晰で9才で仏門に入り寶飯郡形原村（現、蒲郡市形原町）眞如寺青空號雲上人に師事した。壮年になって、京都西山光明寺および京都の名僧の門を叩き苦学研鑽の後、地元に戻った。25才で幡豆郡味濱村（現、西尾市一色町味浜）満國寺（満国寺）音空上人に師事した。1841（明治12）年、寶飯郡形原村（現、蒲郡市形原町）眞如寺（眞如寺）住職、1843（明治14）年京都本山圓福寺に栄転し、63世の法燈を継いだ。兵火罹災の跡を受け、その復興に努力し、中興の大業を行った。また、浄土宗西山深草派法王に前後16年、菅長の職に数回就いた。1895（明治28）年、龍泉寺に勇退した。1897（明治30）年10月13日大往生した。六ツ美村誌より引用。

【平野重兵衛（1827～1894）】

平野重兵衛（ひらの じゅうべえ）は幼名林之助と言い、1827（文政10）年10月に大字中嶋字新町に生まれる。父を安左衛門と言い、母は石原氏である。明治維新後、祖父の名前を継いで重兵衛と名乗った。幼いころから、家業の商売（商業）を好まず、龍泉寺の普翁賢岡上人に付いて文学を学び、武術を西尾藩士安丸氏に付いて学んだ。額田郡本宿村（現、岡崎市本宿町）の富田氏をつてに、中嶋領主小笠原長常の御側用人となる。小笠原長常が京都町奉行時代は頗る多忙であった。明治維新後、小笠原家は駿府（静岡市）に移住したので、役を辞して国に帰り、岡崎傳馬所（街道の宿駅で人馬の継ぎ立てを行う所）に勤務した。暫くして、村に戻り、庄屋や副戸長の御側用人、碧海郡地租改正係などを職業とした。1880（明治13）年隠居し、1894（明治27）年3月19日病死した。六ツ美村誌より引用。

【石川嶺観（1828～1911）】

石川嶺観（いしかわ れいかん）は浄光寺（岡崎市）の第15世住職。号を松林庵といい、1828（文政11）年の生まれである。17、18才の頃より小笠原長門守の代官早川文右衛門と親交があり、茶道をたしなみ、松尾流宗家に入門して熱心に修業し、その奥義を極めた。書画骨董を愛玩し、これにより鑑識眼が高く、この地域の権威者になった。常に、京都、名古屋、金沢等の茶人及び骨董家と交流があった。六ツ美村誌より引用。



第15世石川嶺観 1911（明治44）年1月3日
浄光寺提供

[鍋田丑之助 (1829~1898)]

鍋田丑之助（なべた うしのすけ）は六ツ美村大字中嶋字本町（現、岡崎市中島町字本町）の鍋田平兵衛の長男として1829（文政12）年正月朔日（元日）に生まれた。幼名を周太郎と称し、後に丑之助と改めた。家號を鍵屋と言ひ、米穀綿商に身を起し、老後、家業を廃し、自ら公共の事業に奔走し、殖産を説き貯蓄を奨励した。1898（明治31）年4月8日に病死した。其の壽像（じゅぞう：生前に作っておく）碑は浄光寺境内にある。（現在は、鍋田家の所有地にある。）六ツ美村誌より引用。

本項は以下の資料から引用した。

[六ツ美村誌]

編者： 六ツ美村是調査会
発行： 六ツ美村是調査会
発行日：1926（大正15）年12月1日
発行所：日新堂書店
印刷所：活版印刷所

[岡崎の人物史]

著者： 岩月 栄治
編集： 岡崎の人物史編集委員会
発行日：1979（昭和54）年1月5日
印刷所：研文印刷社
「板倉勝重」（P89）、「野本新十郎・渡邊弥蔵」（P99）、「早川龍介」（P150）、「鶴田勝蔵」（P190）、「太田功平」（P192、土井町）、「石川成章」（P249）の記述がある。

[三河知名人士縁]

編者・発行者：久米康裕
発行所：尾三郷土史料調査会
発行日：1939（昭和14）年10月21日
印刷：小林印刷所
鋤柄正平、足立俊次郎、石川成章などの記載がある。

[研究紀要 昭和第四号]

編者： 稲垣 弘一
発行者：稲垣 弘一
発行日：1976（昭和51）年3月10日
発行所：岡崎地方史研究会
印刷所：桃山書房
「浄土宗西山深草派 三河十二本山を中心にして」（P43~P69）の中で崇福寺（中島町）とその末寺の説明がある。